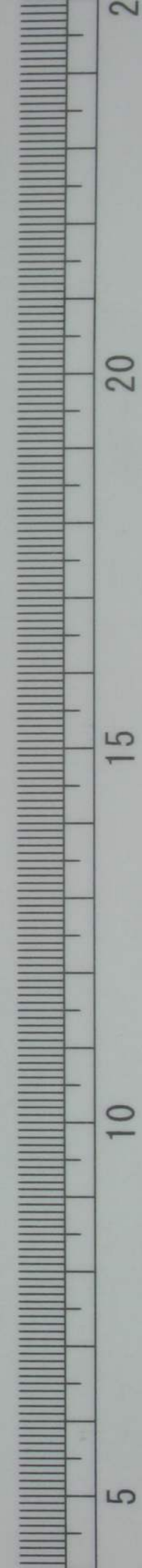
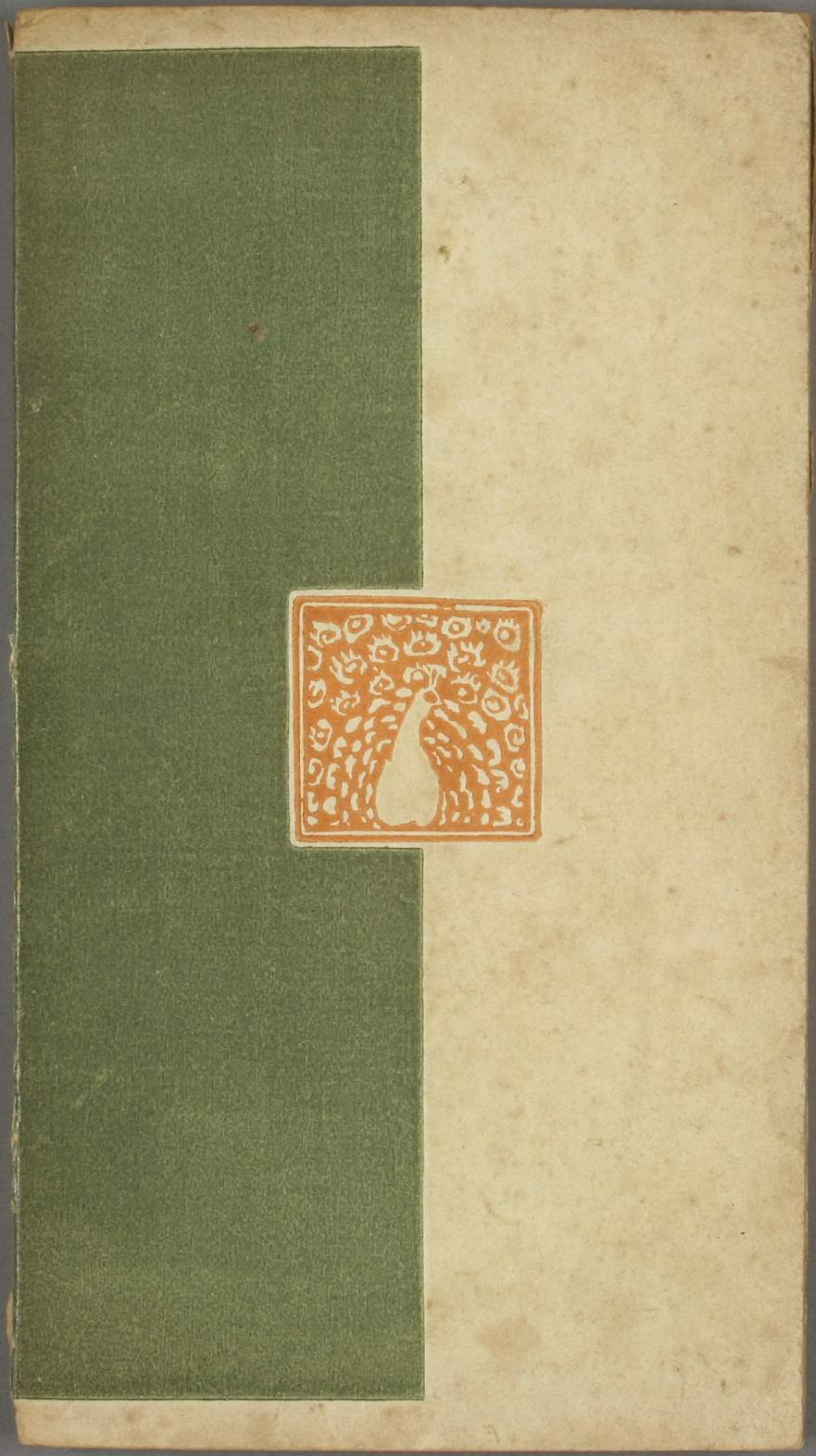


魚帆

尾上柴舟









金帆

尾上柴舟

序

遙けき岸を戀ひそめて
理想の島を夢にみし
磯あげむとていくたび
われは磯邊に立ちにけむ

花藻のゆらぎさだまれば

また海鳥の羽ばたきよ

潮さわぎて風あれて

夕日は波にながれたり

砂に落つる涙もて

小ささ歌はしるしつゝ

黄金を浴びて過ぐる帆に

將來の運命をうらなはむかな

目次

低唱

1

暴主の墓は―雪崩の音は―希望を雲の―
姫鳥かゝる―あらしに髪は―甘き夜露の―
―あしたの空の―君が柔手を―君よしは
らく―いづこの磯に―光榮ある國は―眠
と死とは―小鹿の夢を―野邊の霞は―葉
末の露も―楯のしるがね―涙の味を―野
邊に花なき―聲あるものは―一步外さば

1

君を見そめし胸のいたみを光榮も
すくなきしらべ拙き壊れし塔に花
の息さへ

波上.....29

湖畔.....32

小貝.....35

牧人(Heine).....37

聲.....45

もとめ(Moulton).....47

村.....53

若き貴女に(Cowper).....55

アマリヤ(Schiller).....58

汝が心を.....62

白鳥.....65

破船者(Heine).....70

あらし(Aldrich).....77

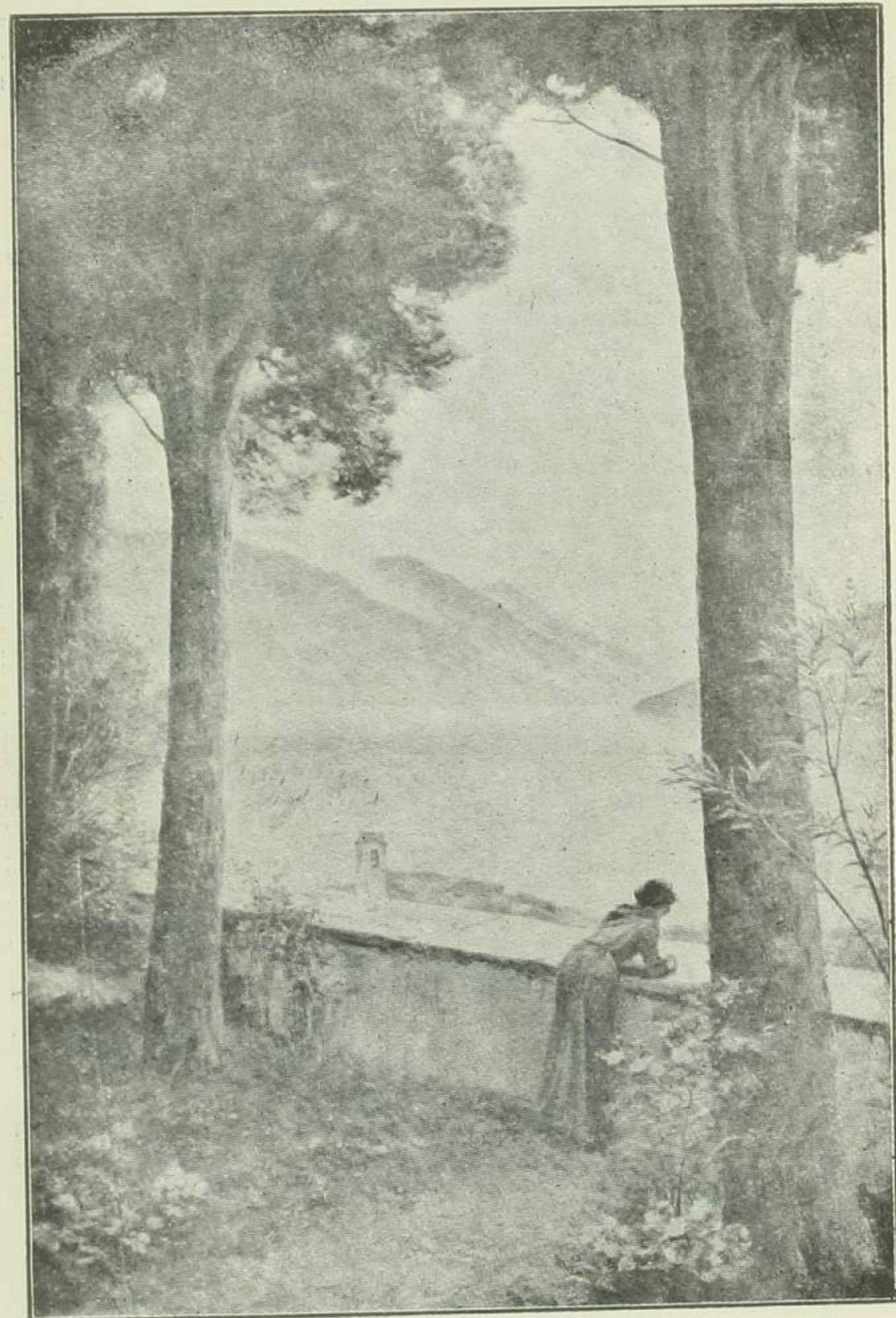
あゝ一年.....94

流矢.....104



J. Macwhorter, W. A.

航行 (Heine)	108
訣別 (Schiller)	111
海 >	119
船室の夜 (Heine)	124
表紙	柴崎恒信



J. Macwhirter, R. A.

表紙 柴崎恒信
航路 (Haino)
航別 (Haino)
海
船室 (Haino)
124 119 111 105

低
唱

唱
低

○ 暴主の墓は苔蒸せど
鳥もかへらぬ故郷や
囿をとり吊つりにし森の木に
夕月ひくうかゝるかな

雪なだ崩れの音は聞ゆれど
日かげのどけき朝の谿たに
スイス少女はやさしうも
われにと摘むよ花小草

○ 希望のぞを雲の彩にのせ

ひとり君待つ島の磯
松をくゞりて過ぐる帆の
七つまでこそ數へしか

花藻むらさき波よれば
もつれもつるゝ夕かげや
巖をこえて湧きのぼる

潮しほのみどりに海暮れぬ

○

姫蔦かゝる君が窓
君が手とりてそとよりぬ
と見るは夢か夢ならむ
と見しも夢か夢なりし

あらしに髪はみだされて
涙に頬は色褪せぬ
過ぎし十年を見かへれば
わが世は冬の日なりけり

甘き夜露のしたゝりを
花より花に葉より葉に
はぐくまれたつゝはぐくみつ
あゝ幾年かこゝに立つ

ひと夜の戀の私語を
嫉みてあてし魔の杖や
少女少年のひと時に
化りにし森の花桂

○
あしたの空の紅薔薇

野にある友やさそひにし
あたらしき日のあけゆけば
またあたらしき野邊の花

○
君が柔手を離れては
わが天地ぞくづれたる

今宵七夜をゆきまして
かへり來まさぬ夢の君

○

君よしばらく書かふせて
君が心をかへりみよ
まだ讀まざりしその時と

半讀みにしその時と
讀み終へたらむその時と
清さはいづれまさるべき

○

いづこの磯に宿かりて
いづこの島に友と逢ふ

霞に暮るゝ野の末の
虹の輪くゞり鳥は行く

光^は榮^はある國はそなたぞと
思ひさだめしをさなさよ
鳥はかへりぬ雲ゆきぬ

されども西は西にして

眠と死とは一つにて
死になば罪は消えぬてふ
夜々の眠に落つれども
たゞ我が罪は罪にして

○
小鹿の夢をしたひつゝ
あした訪ひよる森のかげ
水のしろがね岩うてば
おのづからなる快^け樂^{らく}の譜

○
野邊の霞は濃けれども
とすれば風にやぶられて
小鳥の夢はみだれがち
森の緑はふかけれど

狩人の角ひきなば
小鹿の夢は守りえず

夢を此世のなぐさめと
たのみて來つる人の子は
あゝたゞ聖母のありてこそ

○
葉末の露も地に落ちよ
岩間の水も音たてよ
この世の眠さますべく
今こそひゞけ君が琴

楯のしろがね日に榮えて
君いでたゝす野邊の道
城の窓よりそとはなつ
鳩の使に聞きませや
とらはれの子が低き歌

○

涙の味を知りそめて
よるになれたる森の木や
實ならぬ木には神ぞつく
年を數ふる葉かげには
すだまこもると人はいへ

○

うらさびしさの潮のごと
梢をおほひ葉をおほひ
幹をおほひてよせくれば
われは磯邊のはなれ岩
はなれて立つにえ堪へむや

野邊に花なき世を思へ
花に露なき世を思へ
人に笑なき世を思へ
愛に絶えたる世を思へ

聲あるものは聲に死に
色あるものは色に消ゆ
愁あるものあゝ遂に
あゝあゝ遂に何に逝く

○

一步外さば倒るべし
ふむ階段に心せよ
一語たがはゝ罪あらむ
人と行く世に心せよ

○

君を見そめし湖岸の
葦の一片をそと切りて
捲きてし吹けば我笛の
しらべは高うなりにけり

○

ひゃけ今宵もとくひゃけ
夕月青き森にまで
森の中なる城にまで
城の窓なる君にまで

○

胸のいたみを洗はむと

ひとりたちよる山澤や
楡の古葉のかげくろみ
あゝまたこゝに哀の色

○
光榮もすくなき思出を
心のまゝに逐はしめよ

あこがれそめし魂の
再び身には歸り來じ

○
しらべ拙き我が笛も
かたみと吹けばよりに來ぬ
詩より生れて詩に逝きし

人は鳥とやなりけらし

○

壊れし塔にかゝりても
常春藤はとはに榮えたり
歌に迷へる弱き子の
よらむはひとり歌にして

○

花の息さへ聞ゆやと
思はるゝ夜の静けさも
灯のまたゝきは息めえず
夢おだやかに結べども

心臓のひき絶えずして
血汐のながれとまらず

あゝ人おもへ胸の火の
またゝき弱うなるまゝに
生命の油盡きてゆくとも

波 上

夏の真晝を風死して
熱さに燃ゆる潮の色
折れし橋裂けし帆の
かげに半は死に入りて

見やるみ空のはてもなき

ひと夜あらしに分けられて

行方も知らぬ友舟や

黄金もとむと郷いでて

波に任せし百人の

残り十人となりにけり

餓に暑に身はなえて

起きあがるべき力なみ

右舷左舷のこゝかしこ

微けき聲の呼びかひに

それぞと友をたどるのみ

せめての糧とたのみにし
水さへ今はつきはてぬ
胸の炎に身の熱に
命絶えぬと思ふとき
忽ちひゃく「舟よ舟よ」
「立てや我友いざや立て

今友舟は來りたり
潮のとよみを壓したる
舳うしの聲は高けれど
起きえしものは我ならず
「息ある人はなかりけり
情も知らぬ海鳥の

嘴はしに面はやぶられて

二十日あまりのたゞよひに

あゝその血さへ渴きてし

人の私こひ語かたひくけれど

おのが運う命めも知らるゝよ

黄金の岸を夢に見て

身を海鳥にまかせつゝ

とはの眠にいざや入らまし

湖畔

月出づ月出づ森の木の間

けぶれる緑のかげをくゞり

やさしき光は水を射たり

牧場のあしたにさまよひそめて
あゝわれ歌人國をばはなれ
今こそ着きたれこの湖の岸

わが笛とらむに腕は萎えぬ

水よりはなるゝ睡蓮の花
汝にぞ任せむ今宵の歌は

小貝

疲れし眼まなこに落ちくる眠
さながら沙いさごに身を投げをれば
夢かとゆらめくさ波の上に
夢よりかすけき月こそやどれ

「遙けきひゞきを聞きしか君よ
しらべは波よりいといと低く
呻吟うゑんにあらねど歌にもあらず
人魚のさゝやきそれにもあらず」

「岩かげ鷗の羽ばたきやみて

魚さへ蟹さへ眠れる宵の
静けき大氣をゆるがしつゝも
何物何とか聲をば立つる」

「そはこの島なる小貝のわざと
船人今朝しもわれにぞ告げし
たゞたゞ聞きませゆかしく細く

君をば愛せとわれにぞ語る」

牧 人

羊飼ふ子はたゞ王よ
緑の岡は玉座にて

頭上じやうじやうにかゝる天つ日は
大きな黄金の冠なり

足下に眠る小羊は

あかき十字の媚人びとよ

誇に満ちてさまよへる

小牛はまこと騎士にして

野羊やぎは朝廷てうていの俳優びやくいよ

鳥と牝牛は笛をもて

小さき鈴のひゞきもて

たえず奏かなづる部屋の樂

この物の音ねにこの歌に

瀧のとゞろき樅の風
ひゃき通へば聞きながら
夢に入ります王の君

王の夢路に入りませば
一いの大臣おとの牧の狗
かはりて守るとその聲を

あたりを高うひゃかすよ

夢にのたまふ若き王

「あゝわがつとめ重きかな
とくわが家にかへりゆき
女皇のそばに眠らまし

その人の手にやはらかに
わが頭をしやすむれば
その愛らしき小腫に
わが限なき國ぞ見ゆなる

—Heine (Harzeize 42)—

聲

鷗むれ飛ぶ岩の上
のぞみに満ちてわが立てば
あしたの風はさゝやきぬ
「夢みたまふなあはれ君」

入日さしそふ島のかげ
思ひしづみてわが行けば
ゆふべの波はさゝやきぬ
「夢みたまへよあはれ君」
風と波とをよそにして

思になれし室むろのうち
何とはなしに額づけば
たふとき聲はひゞきゝぬ
波よりもはた風よりも
まことの聲はたかきかな
「夢みるなかれ夢みるな」

夢よりなれる人の子よ

もとめ

い照る光のおごそかに
夏の日波にかたぶけば
水もみ空も一色に

かゝやきわたる夕まぐれ

光はえある西の海

そこにやすみの樂の

幸さいある島をもとめむと

白帆あげたる妹とわれ

しづむ日かげに照りわたる

黄金の岸に舟は來ぬ

されど光にそむきたる

巖のさまの恐ろしさ

洞には魔女のうたひゞき

磯には渦の音たかし

幸さいある島はこゝならじ

静けき海やよそならむ

わたのとなかを見わたせば

ゆく汐はやし風はやし

われ等の望待ちとらむ

その島々やそこならし

みどりの小草生ひそひて
色やはらかきその岸や
とはに晴れたる大空や
風にまじらふ花の香や
そを覓めむと帆をあげて

行かむとすれば我妹子は
「待ちませ君よ夜はさむし
知らざる路をいかにせむ」
術しあらねばたそがれを
もとの岸邊に歸り來し
たかき榮光にそむきつゝ

もとのわれ等に歸り來し

妹のおそれの強ければ

再びゆかむすべもなし

舟の指揮者をあたらしく

神よりたまふことなくば

神したまはゞ海中に

舟出をわれら厭ふとも

幸ある島は見らるべし

とはのよろこび得らるべし

村

朝の香たかき岡に立ちて
とよめく村のこゑきけば
むかしのわれにかへるかな
青葉につゝむ柴の戸の

中よりひゃく梭の聲
朝焼うつる里川の
末にはめぐる水車
鍛冶の錠にまじりつゝ
騎兵の蹄とゝろくよ
黍つむ車入りはてし
森よりおこる銃の音

賑はしきかな朝のこゑ
豊かなるかな朝の村
あゝ故郷もかくありし

若き貴女に

かの森の木かげのみちをめぐりゆく
清き水こそ
しな高き彼の處を女子もにふさはしきし
るしとは見れ
人の世の樂たのしみおほきいそがしき群をば
はなれ
静やけくはたおだやけくしかはあれ

ど 撓まぬ力
さだまりて行くべき道を撓みなくた
どり行くなり
なすところいたづらならずなせばみ
な卑しくはあらず
行くところ人を幸さいきはひおのれまた幸さいき
はゝれつゝ

鏡なしたゝふる水とその胸の清くし
あれば
ひさかたのみ空の光うつせるよをと
めのおもて

アマリア

ワルハラたのしみの樂にみちたる天使のごと
く
世のなべての若人よりも猶彼れは美
はしかりき

たとしへなく温和なる彼れの眼まなざし
は
緑なる鏡なす海のおもてにてりかへ
す五月さつきの日影の如くなりき

彼れの接吻そはこの世ならぬこゝち
せしよ

二つの炎の相あふ如く
二つの琴のよく調ひてたへなる響を
たつる如く
靈と靈とは衝きあひぬ飛びかひぬ
はては一つに溶けあひぬ
魂は魂に流れ入りぬ
天と地とは愛者のめぐりに溶けしが

ごと浮び出でぬ

今や彼れゆきぬ — 益なきな
げきよ
たゞたゞ益なきなげきに彼れを戀ふ
るのみ
今や彼れゆきぬ我世のなべての樂は

この嘆なげきに失せ果てしよ

—Schiller—

汝が心を

汝なむぢが心を信するなかれ
夜の神闇の手高う擴げ

70

牧場も古沼ふるぬまも森も谷も
一つ沈黙しんもくにかへしゝとき

71

くるしき夢をさ霧のめぐり
おもたき額ひたひを夜の氣のうたば
汝なむぢの勇氣はみるみる消えて
汝なむぢは恐怖おそれの奴隸おとことならむ

汝^{なむぢ}が友をば信ずる勿れ
共にしあらむの契はかたく
手をとりに入りたる廣間の中
金燭銀燭燃ゆるのとき
一たび舞踏の樂の音ひゞき

小さき唇來てさゝやかば
汝^{なむぢ}にそひたる汝^{なむぢ}が友は
忽ち汝^{なむぢ}を離れて去らむ

白鳥

夕やけに翼をそめて
雪よりも白き水鳥
池のおもに今ぞ下りくる

葦かげに舟さしかくし
獨わがうかひをれば
いひしらぬ思ひぞおこる
雪しろき山のあなたに
一くきの笛手握りて
さまよひし野のあさぼらけ

星消えて花紫に

鳥のこゑ水のさゝやき

人の世のあゝものならず

藻の花のしろきをわけて

しろがねの櫂とる少女

まぼろしに見てしおもかけ

わが笛に舟はより來ぬ

わが笛を少女は吹きぬ

かくてわれ我等となりぬ

あさなあさな舟さしよせて

われ漕げば少女をは吹きぬ
われ吹けば少女をは漕ぎぬ

あゝ時よ何の力ぞ

おのが手に人の手はなち
機はなちこゝに幾年

水草の花くひもちて

わが方によりて来る鳥

その人の使者かあらぬか
魂かあらぬか

破船者

望も戀もつきはてゝ
寂しく寒き磯の上
我たゞ一人ころぶせば
海に憎まれ投げられし

人の屍かばねに似たりけり
潮うしほは前に湧きかへり
惱うれは後に迫り來ぬ
霧の桶もて大海おほの
水汲みあぐる雲の姫
風に形もさだまらず
我わをば越えて緩やかに

いと緩やかに引きゆけば

再び海にこぼすかな

わびしくつらきこのわざや

思へばわが世に似たりけり

鷗叫びて波鳴れば

過ぎしおもひぞ胸に湧く

むかしの影もはた夢も

楽しくつらく胸に湧く

王の如くもうるはしき

たをやめ住めり北の國

白き衣にまとはるゝ

細き姿のやさしさよ

幸さいらある夜のいろなして
編かむらめる冠の頭かむらより
流ながれてかゝる黒髪は
白しろく樂たのしきその面おもてに
捲まきてたれたり夢のごと
猶なほその面にかゝやくは
大おほきくつよく黒みある

天あまつ日ひなせる双ふたの眼めよ
黒くろき天あまつ日ひ汝なんぢを見つゝ
燃もえ立つ靈たまの炎えんをば
幾いく度たびわれは吞のみつらむ
立たちつる我われのよるめきて
醉よめひてし時に鳩となして

やさしき笑あはれはうかびきぬ
誇にかたく結ばれし
その唇の開けては
てる月かげか薔薇の香か
やさしくひゞくその言語ことば
聞くに忽ちわがこゝろ
天にぞのぼる鷺ごと

鷗も波も黙もだしてよ
幸も望も今はなく
望も戀も今はなく
舟さへなくて砂の中に
熱き面を埋めつゝ
磯にころぶすわが身なり

あらし

— Heine —

見よ見よ少女をとめは磯邊に立てり
遙けき波路をうち守りつゝ
夜はたゞ凄まじ凄まじけれど

88

なほなほ凄まじをとめの面おもて

89

何をか見つめて何をかなせる
訝しをとめは何をかなせる
いかなる悪魔か雷かみはた風の
夜よにしも彼れをば誘いざなひいでし

そはこの磯なる幽鬼の精か
あら波いよいよはげしくのぼり
警^{のろ}烽^しは炎の投槍のべて

あらしの闇^{やみ}をばた^たさしとほす

か^ややく光の彼方の沖を

商船一つぞた^たよひ過ぐる

あらしは索^{つな}具^ぐを通してすさび
橋くだくとた^た吼えたける

死^し人の骨をばとくうち越えて

怒に泡立ち高まる海よ

危しあやふし警^{いさ}戒^めの叫

あたりに響かし鶴こそ翔れ

危さいかにとさだかに知らで
海燕藻草の輪に攀ぢつきて
乾きてあれたる小草の中に
あやしの指もて波をば拏む
怕るゝことなく波路を見つめ

磯邊に立ちたる少女は誰そや
眞白き靈鬼のさまよひいでし
地獄の海岸さながら見ゆる
夜はやうやうにあけそめて
波はなぎゆく磯づたひ
ぬれはてし巢に駒鳥呼べば

籬まがきに咲きぬ山さん楂ざ子しは

露ちる松をくゞりつゝ
ひそかに朝は迫りきぬ
重たくこめし海霧は
槍なす光に消え去りぬ

しめれる砂になほ立てる
をとめに朝のあけゆけば
見ゆる岩根の水か夫この屍かたな
あゝこの人の情ひ人とならばならば

あゝ一年

あゝ一年こゝに一年
木枯のさびたるひゃき
ゆくりなくみ夢さそひて
詩の空の燈となりし

天つ星一つ落ちしは

あゝ一年こゝに一年
曉さむき御居間の次に
召したまふこともやあると
兄達のみあとにそひて
語なくさぶらひにしは

あゝ一年こゝに一年
枯山なす武藏青山
冬草の霜かきわけて
星しろき夕べの土を
御常衣と著せまつりしは

あゝ一年こゝに一年
御夢は遂にさめずて
木枯のこゑのさびのみ
癒えやらぬ傷手にしむよ

涙あれど歌はあらず
痛あれど詩はあらずして
今日の日の今日の御前に
捧ぐべきものまだもたぬ
あゝ一年こゝに一年
かくあれの御旨なかりき

御教はかくあらざりき
しかながらあゝしかながら
一年は遂にめぐりし
あゝ一年こゝに一年
「毒草」のくしきかをりに
「天彦」のたかきひゞきに

うらやさし兄の御弟子ら
御眉をひらきまつりし

あゝ一年こゝに一年

たゞ小さき小さき「銀鈴」

これだにと御座の前に
そとおきて立ちてゆく子を

あはれとは見ませ師の君

―先師萩の家先生の一週忌に―

流矢

駒鳥の今日も來啼きて

窓の戸の李ひらきぬ

花環をばつくりてみむと

下り立てば流れくる征矢

誰が弓を外れてか來つる

芝の上にあさく立ちたり

羊飼ふ牧のわらべと

語りしは昨日なりけり

「汝こそは羨しけれ
身に負はぬ憂なくして」

「君こそは羨しけれ
美しき戀になやみて」

苦しきはなに美しき
戀の子の黄金の鍬きり

いつしかも身におひそめて
身におはぬ戀を負ふわれ

航行

身を櫓によせかけて
ひとり数ふる沖つ波
わがよき故郷よいざさらば
わが舟とくも走りゆく

窓の玻璃戸のかゝやける
人のあたりは過ぎにけり
眼見はりて立ちにしも
うなづく影はなかりけり
見えすなるまでわが眼には

な 集りそわが涙
この大なるかなしみに
やぶれなはてそわが心

—Heine—

訣別

山よ牧場よいざさらば
しづけき谷よいざさらば
ふたゝびわれは還り來じ
とはのわかれを今告ぐる

おほし立てゝし草も木も
榮えよとはにうるはしく
洞よ泉よいざさらば
わが歌聲にこたへにし
谷のこだまよいざさらば
再びわれはかへり來じ

わがよろこびの此里も
われは捨つべしとこしへに
散れよ荒野に小羊は
汝は主なくなりたれば
汝にはあらで兵士を
われは逐ふべくなりたれば
迷へる希望それならで

神の御召にあひたれば

炎の中にホレブ峰ねの

モーゼの前に下りつゝ

フッラオにあたれと諭してし

あるは牧人ダビッドを

戦士と撰えりて出でしめし

神は木間こまよりのたまひぬ

「行け行け汝なんぢは世の人に

われあることを示すべく

やさしき胸も手も足も

かたき鎧よろいに装へよ

罪ある浮世のたのしみに

運命をほりに近づかば
わが旗とりて畠つ物
刈り取るごとく誇り立つ
國の敵をうちやぶれ
その幸をうせ崩せ
兵士すくひライムすくひ
王に冠をつけしめよ

心とらるゝことなかれ
かの花嫁の花環をも
愛しき稚兒をももつなかれ
されどすぐれし戦の
譽に汝を照らしめむ
勇士ひるみてフランスの

天のしるしとたまひたる
冑をとればおのづから
神の力はわれにあり
天使の勇氣燃えたちて
あらしの如く戰場に
強くもわれを引き立つる

あゝとゞろきは迫り來ぬ
喇叭の聲はひゞき來ぬ

—Schiller(Jungfrau von Orleans—Johanna 訣別の大意)

海へ

柏の林の露吹きちらし

楊柳の木立の日かげをゆすり
窓かけ靡びかしさと入る風は
「海へ」と「海へ」とわれをぞ呼ばふ

羊毛なしつゝ雲たゞよひて
温みを帯びたる白銀色や
月光巖を流るゝ宵に

はじめて見たりきあゝわれ海を

魔の手と眞白に波逆捲けば
深碧いよいよ黒みを加へ
遙かにほのめく漁村の火をば
海女の瞳とかゞやかしめし

牧場につゞきてわが住む小村^{こむら}
春草若草みどりを布けど
さか捲きほのめき流るゝ絶えて
たゞたゞ静けき地上の海や
「海へ」と「海へ」と呼ぶ聲聞けば
忽ち心はあこがれそめて

見る見るわが目に浮びぞ出づる
月光高波漁村の燈火^{ともし}

船室の夜

海には眞珠まなこの數ぞひそむ
空には星の影ぞしげき
されども心わが心には
わが心には愛こそやどれ

海と空とは無邊なれど
いかでか如かむわが心には
珠より星より猶うるはしく
輝け輝けわが愛こそは
小さくわかき少女よ汝いまし

わが大なる心に来れ
このわが心も海はた空も
愛の前には消えむとすなり

*

*

*

*

*

*

緑色濃きおほみ空
星美しう照らすところ

わが唇を押しあてむ
狂ひて泣きて押しあてむ

かの星こそは戀人の
眼まなこなりけれ百千度
きらめきぬはたうなづきぬ
みどり色濃き空の遠ちとに

緑色濃き大み空に

わが戀人のやさし眼まなこに

随喜しつゝも手をばあげて

われは願ひぬはた祈りぬ

めぐみの光よ愛はしき眼まなこよ

おゝわが心に幸さいわいあらしめよ

われをば死なしめ汝なれのみならず

すべてのみ空をわれに得しめよ

*

*

*

*

*

*

み空の眼めより闇をば通し
をのゝく黄金の光ぞおつる

愛ある心はいよいよひろく
ひろごりゆくなりそを見て居れば

おゝ頭上なるみ空の眼めよ
おのが心に泣きつくせよ
かゝやく星なす汝が涙もて
おのが心の流れむまで

波のまにまにゆられゆられ
さながら知らぬ夢見るこゝち
闇なる隅なる臥床どにのぼり
船室しづかにわれ横たはる

*
*
*
*
*

開け放たれし屋根の窓に
高くきらめく星ぞ見ゆる
わが戀ひ戀ひしあゝかの人の
やさしきゆかしき眼をさながらに
やさしくゆかしきその眼は高く
頭上にかゝりてわれをぞ守る

緑の色濃きみ空のあなた
かゝやき瞬きはたうなづくよ
こゝろによるこび緑のみ空
多くの時をば見つめぬわれは
眞白さ霧のたなびきわたり
ゆかしき眼をばおほひしまでは

板もて張りたる船の壁に
夢みる頭をもたせて居れば
波こそくだくれくだくる波は
さゝらと音してひそかに耳に
さゝやくつぶやくこれらの語ことば

「あはれをこなる汝なれ若人よ
汝が手は短しみ空はひろし
星はかゝれりかしこに堅く
益やくなきのぞみ益やくなき吐息
たいたいたは汝は眠るに如かず」

目路のかぎりは雪に埋れ
しづけき荒野に葬られつゝも
さびしく冷たき死の眠をば
眠るとわれこそ夢には見つれ

さはいへ暗きみ空のあなた
わが墓見おろす星の眼

136

ゆかしき眼よ勝利にみちて
しづけくさやけくされども愛に

愛には満ちて

137

あゝとはにはにかへるや
かへらずや歌に夢よぶとも
し火のまへ

明治三十八年五月のはじめ徴兵検査の前夜この小詩巻を編みなへて

柴舟生

明治三十八年六月十日印刷

明治三十八年六月十三日發行

金帆奧付

定價金四拾錢

著者

尾上八郎

發行者

東京市本郷區駒込
吉田正太郎

印刷人

東京市京橋區南小田原町
二丁目十二番地
今井鐵次郎

印刷所

同
今井活版所

發行所

東京市本郷區駒込
本町二十六番地
郷書院

賣捌所

東京堂、上田屋、前川文榮閣、林平次郎、大野書店、東海堂、北隆館、長明堂、大阪吉岡、中川、杉本書店、久留米、菊竹、名古屋川瀬、星野其他各書店



與謝野鐵幹君合著
 上野晶子君序
 馬場孤蝶君跋
 藤島武二君畫
 内海月杖君序
 薄田泣菫君跋

毒草

四六大方形美本
 製(表紙クローネ製)紙數百餘
 洋裝並製金五拾錢
 市內小包料五錢
 郵稅各金六錢
 製本既成

この夫妻の新しい詩文集を「毒草」と
 云ふ。知らず、讀む人をして酔はしむ
 るや、睡らしむるや。躍りたしむる
 や。唯見る、紅紫の花月もあやに、砂
 香、素すばかり薫りぬ。初版早々盡さ
 り。こゝに増補訂正第三版を出させ

押川春浪先生著

世界少年冒險譚

定價金三十錢
 郵稅金四錢

月が黒いか。風が白いか。奇雨靈風慘
 として人目を暈せしむもの。是れ冒
 險譚の特色にあらずや。押川春浪先
 生は、現代冒險譚作者の白眉也。天橋
 離奇の筆を提けて、蕩目の景に赴く
 や。黒汁淋漓として、牛鬼狐精皆躍る
 の感あり。此篇、先生が得意の作を蒐
 めて一卷となせるもの、寔に一代の
 珍となすに足れり。其筆や奇、其文や
 快。明窓机の下執つて之を讀めば、彷彿
 として篇中の人となるが如し。鬼
 が出るか、蛇が出るか請ふ此の作に
 就いて之を徵せとこそ。

大學教授 芳賀矢一先生校訂
 大學助教授 藤岡作太郎先生序文
 文學士 佐藤芝峰先生著

英燭 對譯 小倉百首評釋

定價金四拾錢 郵便稅四錢
 小倉百首一度出でしより爰に幾百歳、竜田吉野の花紅葉宛として机上、一冊に句ふの觀あり。文學士芝峰君、優麗婉婉の筆を以て之を釋し、英燭兩譯を加へて批言最も剴當を推す。文の妙、評の巧、現時の文界多く其例を見ざる所也。和歌を嗜むの士、語學を修むるの、焉んぞ此書を閱せずして可ならんや。冒頭添ふる所に總論一篇、最も著者の識見を伺ふに足る。幸に一讀を玉へ。

東洋女學校 講師 高橋菊衛
 愛國女學校 講師 櫻井岩衛 合著
 三輪田女學校 講師 櫻井岩衛
 日本女學校 講師 櫻井岩衛

新編 實用裁縫書 普通部

定價參拾五錢 郵便稅六錢
 壹冊百六拾頁、折圖七枚
 其他大小插圖百八十餘種
 本書は多年斯道の教授に從事して、術教授法等の實驗に富みたる兩先生の合著にして、小學校高等女學校等の教科書參考書として最も適當なるのみならず、家庭獨修の上にも、最良なる參考書なり。殊に本書は從來世間に流布する此種の著書に比すれば、材料豊富に文章平易簡明なるが上、説明多量に挿圖を以て精密篤に説明せられて、毫も難解の弊なきものなれば、斯道を研究せんとする大方の淑女へ、一本を購讀して參考に供し給へ。

新 詩 山川登美子君 合 第
 社 增田まさ子君 二
 同 與謝野晶子君 作 版
 人

戀 中 澤 弘 光 君 畫

山川登美子、増田雅子、與謝野晶子の三女史は、多年新詩社の閨秀作家として、詩名夙く、明星紙上に顯れ、近時我國短詩壇の潮流いと新らしきものあり。由は、實に女史者首唱の力多きを以て、わが書院に「毒草」に出たり。今また切に三女史を乞ひて、集を得たり。山川、女史は既に二三の著あり。増田史は二集に至りては、この集を以て初めてその詩才を窺ふべし。世を擧げて功利的趨き、未だ文藝の眞實なるを窺ふ者、讀めり。稱する者、往々猶書をむとす。熱意か、當り、自家を語らざるは、詩界の偉觀なるのみならず、人間の榮譽、生命、まこと此に在るを悟るべきなり。

みだりな髪型、美しい本、紙數百三十頁、前刷印、月四錢、郵稅四錢、發行所、東京市本郷區、元兌發、院書郷本

井上劔花坊序及閣
巖 郷右衛門編

やなぎだる

定價金廿二錢
郵税金二錢

簡勁にして深く人情に入り滑稽にして直に社會を描き美感を人に興ふるは即新川柳の生命なり
輕佻、浮薄、怠惰の社會を諷刺罵倒するは之れ新川柳の赤心なり幸に新川柳の趣味に通ぜんと欲するものは必ず「やなぎだる」を一讀せざるべからず
初版旬日賣切再版

文學士 小原無茲先生譯

西吟新譯

近刻

本書は西歐詩星○ウチーヅウチーヌ
○スコット○フレチャー○ヒーマン
ス夫人○カメル○ヘリック○ハイロ
ン○パンス○ゲイ○ブラウニング夫
人○ローガン○ロングフェロー○ユ
ーゴー○テニンソン等の名吟玉珠を小
原文學士の彩筆を以て新詩型に譯せ
しもの也、西歐文學の精華を味はんと
するの士は須く一本を座右に供へ
ざるべからず

文學士 蜷川石水
渡邊清江 共著

滑稽笑話

定價金廿五錢
郵税金四錢

新式の滑稽笑話○著者は文學士と文學士とで共に赤帽の
兵隊さんである○話は總て嶄新、奇拔で、滑稽笑話、願を解
くまに〜人生百般のこと、特に時局に關して、諷刺的訓
戒的の新趣を漏して居る。紳士淑女諸彦。是非一本を購
つて、新式の滑稽文學を御覽なさい。初版忽ち賣切再版

春鳥集

蒲原 有明 著

裝訂 意匠 挿畫 青木 繁君

四六版 美本

著者の詩は徒らに新奇を
街ふものにあらず。ただ
舊慣に甘んじ難きものあ
りて、直に著者が胸裡に
向て、その餘孽を絶たむ
とする努力なり。随てま
た懺悔なり。こゝに精苦
の作を試み長短積で漸く
三十有餘編を成しぬ。そ
の多くは尋常叙情詩の陳
域を脱して更に別途に出
でたるものなり。著者は
また巻頭の自序に於て、
志すところの什一を叙べ
たり

定價 金十六錢 郵稅 八錢

發行 元 院書郷本 區郷本市京東 六十二町片東

文學士 久保天隨君著

日本絶句選

近刊

人を以てすれば四十家、詩を以てすれば百首、菅公誦居
の詠より以上、人口に膾炙する古今の名吟佳什、大抵網
羅して剩すなく、加ふるに、評釋の文、流麗婉美、一講
すれば齒牙の香三日失せず○明窓淨几の上必ずこの好伴



山崎藏